

論文

薬物依存の当事者に対するイメージと その変化についての研究

谷 家 優 子・松 田 美 枝・加 藤 武 士

1. 問題と目的

令和2年版犯罪白書によれば、近年、犯罪の認知件数が減少し、薬物事犯においては、覚醒剤取締法違反は年々減少しているものの、大麻取締法違反の検挙人員は、平成25年以降増加の一途をたどり、毎年最多を更新している。とりわけ、30歳未満の検挙人員の増加が著しい状況となっている。薬物使用に関する全国住民調査（嶋根，2019）では、有機溶剤は減少傾向、覚醒剤と危険ドラッグは横ばい、大麻とコカインとMDMAは増加傾向で推移しているという結果が示されている。

このようなことから、厚生労働省は、平成30年に薬物乱用対策推進会議において、「第五次薬物乱用防止五か年戦略」を策定し、その中で「青少年を中心とした広報・啓発を通じた国民全体の規範意識の向上による薬物乱用未然防止」を目標のひとつに掲げている。その目標に則って、取締当局は規制薬物についての注意喚起を行い、報道機関においても薬物の害と危険性、恐怖を強調しているところである。

現在、厚生労働省が展開している薬物乱用防止啓発のポスターや冊子は、一度でも薬物に手を出すと人間として終わってしまうかのような悪いイメージを強調したものとなっている。薬物への最初のアクセスを防止することを狙っているためである。

しかしながら、一般住民の中に形成された悪

いイメージが独り歩きし、ひとたび薬物依存者に対するパブリック・スティグマが形成されると、一般住民による薬物依存の当事者への忌避感情が生まれて地域から排除する動きになっていく。そうなると、薬物問題で困っている当事者が薬物を使用して困っていることを誰にも相談できなくなり、医療や福祉へのアクセスが遅れ、孤立を招き、精神症状及び生活状況を悪化させることにつながり、その結果、様々な二次的な問題が生じている。また、パブリック・スティグマはセルフ・スティグマを形成し、当事者自身のセルフイメージと自尊感情を低下させ回復を阻害する結果、薬物へのさらなる依存を加速させるといった悪循環にもなっている。パブリック・スティグマとセルフ・スティグマの悪影響にさらされるのは家族も同じである。家族が薬物を使用し困っている場合、両スティグマがあるがゆえに世間体が気になってしまい、誰にも相談できずに家族内で抱え込み、当事者との関係が悪化してしまっ、結果的に暴力の問題に発展するなど事態がより深刻になり、自ら命を絶ったり、他者を傷つけてしまったりなどの重篤な結果を招いてしまう場合もある。

他方、対人援助職の側でも、薬物依存の当事者とかかわった経験の少なさから、どのようにかかわれば良いか分からず、当事者が本来必要とするかかわりを十分に持てないことにより、医療や福祉にアクセスした当事者が治療やサポートを継続しにくいという課題が指摘されて

いる。その上、援助者が持つ薬物依存のステイグマが適切なかわりを阻んでいることも少なからずある。

また、依存を形成するのは、実は規制薬物だけでない。精神科医療現場における薬物関連精神疾患の悉皆調査（松本，2020）によれば、「1年以内使用あり」症例における主たる薬物として最も多かったのは覚醒剤であり、次いで睡眠薬・抗不安薬、市販薬と続いている。

そのため、本研究では、本校プロジェクト科目ⅠA【薬物依存について考えるクラス】の受講者を対象にして、規制薬物に限定せずに医療用医薬品及びいわゆる市販薬と言われる OTC 医薬品（以下、OTC 医薬品）、アルコールを含めて、薬物依存の当事者に対する偏見と薬物依存からの回復についての偏見、薬物乱用防止にとって効果的と考える内容についてのイメージが、授業開講時と終了時にどのように変化するかを質問紙を用いて調べた。

2. プロジェクト科目ⅠA【薬物依存について考えるクラス】の概説

本校プロジェクト科目ⅠA【薬物依存について考えるクラス】の授業は、学生と薬物依存当事者と共に、若者の薬物使用を低減させるための教育的介入とともに、仮に薬物を使ったとしても回復が可能であることを伝える啓発資料を開発すること、その作業を通して、薬物依存とアディクションについて理解を深め、自己理解や他者との共生を体験することを目的として授業設計を行った。

はじめに、薬物依存についての基礎的な知見の学習を行った。たとえば、薬物には、覚醒剤や大麻などの法律で規制されている薬物だけではなく、医療用医薬品と OTC 医薬品、エナジードリンク、アルコールも含まれており、服薬や

摂取の仕方によっては通常的作用ではない働きが脳内で起こることについての知識を習得した。新聞記事やネット配信記事から、身近に依存する薬剤があり、場合によっては学生自身が常用している生理痛や頭痛などの痛み止め、睡眠剤などの向精神薬が、使い方次第では依存してしまうばかりでなく、非常に危険な行動につながり、場合によっては重篤な事件に至ってしまうことがあることにも触れた。

次に、国内のみならず、諸外国の薬物政策と薬物乱用防止教育について概観した。テキストに指定した「アディクション・スタディーズ 薬物依存症を捉えなおす 13 章」（2020）をはじめ、論文やネット配信等を活用しながら、薬物依存の背景にある「生きづらさ」、カンツィアン EJ とアルバニー MJ が提唱した「自己治療仮説」について学んだ。諸外国の取組として「ハームリダクション」についても触れた。大麻は米国による人種差別に端を発して規制がはじまった歴史があることや、覚醒剤とヘロインは戦争で利用されている史実にも触れた。特に覚醒剤は、我が国の研究者が開発した医療用医薬品であり、第二次世界大戦に利用され、戦後に余剰分が市場に出回ったものであることなど、それぞれのルーツには文化や宗教、政治的な背景があり、その底辺には人権問題が横たわっていることを知り、ステイグマの形成を歴史的な観点から俯瞰した。また、「パブリック・ステイグマ」「セルフ・ステイグマ」の概念によって、自己の中に深く根付いてしまっているそれらについて洞察を深めた。

そして、昨今問題視されているスマートフォンを使用時の SNS やゲームへの依存、ギャンブル、摂食障害、性情報や性行為への沈溺、病的な買い物、窃盗の反復などの薬物以外の嗜癖問題にも話題を広げ、ストレスコーピングの視点により依存症についてとらえ直しの作業を

行った。

薬物依存は、医療・福祉・司法・教育の領域を超えたテーマであるため、それぞれの領域の最前線で当時者やその家族とかかわっている専門家を招いて知見と経験を語っていただいた。具体的には、保護観察官として薬物事件で逮捕された者あるいは少年院や刑務所から社会復帰した者にかかわっている公認心理師、福祉行政において薬物問題がある家庭に介入をしている社会福祉士、医療機関での HIV/AIDS カウンセラーの経験を有し現在は学校現場で生徒の薬物問題に対応している教員、薬物依存の民間リハビリテーションセンター（以下、ダルク）の代表である。それぞれの立場での当事者とのかわり方や思いを存分に語っていただく機会を持った。薬物依存の背景の貧困や虐待、複雑な家族構成、被差別、依存の世代間連鎖、精神疾患などの複雑多様な課題が絡む公開事例検討も行った。

本授業の後半は、薬物乱用防止の啓発資材のアイデアを練り制作に取り掛かった。アイデアや作品の構想ができたところで、ダルクの施設見学を兼ねて利用者らと交流し、それらの体験を利用者らの意見と共に作品に反映させて啓発資材を完成させた。

各回の授業内容を Table1 に示す。

Table1 薬物依存について考えるクラス

授 業 内 容	
1	オリエンテーション
2	依存と嗜癖について
3	国内の薬物依存の現状と課題を知る
4	諸外国の薬物政策を知る
5	福祉・司法における薬物依存へのアプローチ 講師：児童福祉及び更生保護の専門家
6	ゲストスピーカーの話の振り返り
7	医療・教育における薬物依存へのアプローチ 講師：医療と教育の専門家
8	体験談 講師：木津川ダルク代表
9	ゲストスピーカーの話の振り返り
10	木津川ダルク施設見学の事前学習
11	木津川ダルク入寮者との交流・施設見学
12	施設見学振り返り 啓発資材制作
13	グループワーク 啓発資材制作
14	これまでの講義の振り返り
15	合同成果発表

3. 方法

(1) 調査協力者

本校プロジェクト科目 I A【薬物依存について考えるクラス】の2年生から4年生の受講者が対象である。受講者に授業開講時に本研究について説明を行ったところ、受講者15名中15名（100%）の同意を得た。

(2) 調査方法

① 調査時期

プロジェクト科目 I A【薬物依存について考えるクラス】の開講日（2021年4月）に1回目を実施、最終日（同年7月）に2回目を実施した。

② 質問紙調査

a「薬物乱用防止教育を受けた時期」、b「薬物乱用防止の啓発情報に触れたことがある媒体」、c 薬物依存の当事者に対する偏見を測定する「薬物依存の当事者に対する偏見」（Table2）、d 薬物依存からの回復についての偏見を測定す

る「薬物依存からの回復についての偏見」(Table3)、e「薬物乱用防止に効果的と考える内容」(Table4)の質問紙を用いた。a、b、eは該当項目にチェックするもので、重複回答可とした。c、dは「そう思わない」「あまりそう思わない」「どちらでもない」「少しそう思う」「そう思う」の5件法とし、重複回答不可とした。

それぞれの質問紙は、本研究を実施するにあたって共同研究者と一般的にありがちな薬物依存者及び薬物依存からの回復についての偏見や先入観を検討して作成したものである。

Table2 薬物依存の当事者に対する偏見

項 目	
① 怖い	⑪ 支離滅裂
② 意志が弱い	⑫ 凶暴
③ 自信過剰	⑬ 嘘つき
④ 不正直	⑭ 不潔
⑤ 忍耐力が弱い	⑮ 挙動不審
⑥ 自己中心的	⑯ 落伍者
⑦ ストレス耐性が低い	⑰ 不健康
⑧ 見栄っ張り	⑱ 落ち着きがない
⑨ 孤独	⑲ 危険
⑩ 乱暴	⑳ ガラが悪い

Table3 薬物依存からの回復についての偏見

項 目
① 一度でも薬物に手を出したら人生が破滅する
② 薬物依存症は完治することはない
③ 薬物依存からの回復に仲間は悪影響を及ぼすため必要ない
④ 薬物に依存すると一生刑務所に繰り返し入る人生を送るしかない
⑤ 薬物依存から回復するには強い意志を必要とする
⑥ 薬物依存は精神科病院に入院するしか治療はできない
⑦ 薬物をやめることが薬物依存からの回復のゴールである
⑧ 薬物を使用する人はダメな人だから何をしてもうまくいかない
⑨ 薬物依存は快楽に流されやすい性格の人がなりやすい
⑩ 回復のプロセスで薬物の再使用はよく起こる
※②⑩は逆転項目

Table4 薬物乱用防止に効果的と考える内容

項 目
① 薬物の怖さのアピール
② 社会保障サービスの情報提供
③ 依存症の正確な知識の学習
④ 薬物使用の悪い結果を強調する
⑤ 受講しない人に罰を与える
⑥ 薬物を使用する人の悲惨さを伝える
⑦ 医療情報の提供
⑧ 寝た子を起こすので何もしない
⑨ 回復の希望の提示
⑩ 受講者に褒美を与える
※②③⑦⑨⑩は逆転項目

(3) 倫理的配慮

質問紙は、個人を識別する情報を取り除き新たに符号又は番号を付して匿名化した。また、調査への協力は任意であり協力しないことでの不利益は生じないこと、同意後に撤回可能であること、調査を中断できることを紙面で示した。また口頭で説明を加えた。

本研究は、京都文教大学「人を対象とする研究」の承認を得た。(承認番号 2020-6)。

4. 結果

本調査では、授業開始時・終了時共、対象者15名中15名(100%)の回答を得ることができた。

薬物乱用防止教育を受けた時期(重複回答可)については、小学校7名、中学校11名、高校11名、大学2名で、それ以外はなしであった。薬物乱用防止の啓発情報に触れたことがある媒体(重複回答可)については、教員・養護教員が最多の7名、次いでテレビ・ラジオが6名、インターネット3名、本・雑誌・漫画と友人・知人と医療機関が2名、行政と司法機関と大学のサークルが1名であった。家族・親戚はなしであった。

具体的な内容（自由記述）は、行政などでポスターを見た、学校で「教科書に沿って」「視聴覚教材を視聴した」「外部講師の講演」によって「心身ともにおかしくなっていき人間関係も壊れていく」「一度でも薬物に手を出すと苦しい／大変な人生を送る」「なかなかやめられないから使用してはいけない」という記載が散見された。テレビでは「芸能人の事件報道」「芸能人が糾弾されていて怖かった」「ドラマで薬物を使った人が乱暴していた」というものであった。それらの情報によって「薬物を使う人が悪いというイメージがある」「やる気がないからやめられないというイメージ」を持つようになり、「回復しても過去は変えられないからしっかり防止をすることが大切」と学習したという結果であった。中には「授業で（当事者の）体験談をきいた」という記載もあった。一方、「ネットでは『大麻は危ない、依存するというのは嘘』と言われているが本当はどうか?」という疑問もあった。

「薬物依存の当事者に対する偏見」の質問紙については、1回目と2回目共に変数は正規分布しなかったため、ウィルコクソンの符号順位検定を行った。その結果、有意な変化が見られた ($p=.003$)。同様に「薬物依存からの回復についての偏見」について、1回目と2回目の検定で有意な結果が得られた ($p=.003$)。また、「薬物乱用防止に効果的と考える内容」についても有意な検定結果であった ($p=.002$)。

各変数1回目と2回目それぞれにおいて相関分析を行ったところ、「薬物依存の当事者に対する偏見」と「薬物依存からの回復についての偏見」は、1回目 ($p=.014$)、2回目 ($p=.006$) という結果が示された。また、「薬物乱用防止に効果的と考える内容」と「薬物依存からの回復についての偏見」は、1回目 ($p=.028$) という結果となり、いずれも相関が示された。

各質問項目の変化を見てみると、「薬物依存の当事者に対する偏見」の「怖い」「乱暴」「挙動不審者」「危険」「落ち着きがない」は、1回目では「そう思う」「少しそう思う」に半数以上が回答したが、2回目では半数以上が「あまりそう思わない」「そう思わない」に回答し、大きな変化が見られた。「自身過剰」「不正直」「自己中心的」「見栄っ張り」「不潔」は1回目と2回目ともに7割を超える者が「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した。そして、「孤独」「不健康」では、1回目と2回目とも半数以上の者が「そう思う」「少しそう思う」と回答した。「薬物依存からの回復についての偏見」では、「一度でも薬物に手を出したら人生が破滅する」の1回目に15名中10名が「そう思う」「少しそう思う」と回答したが、2回目には1名となり、反対に13名が「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した。その他の質問項目では、回答が反転する動きはなかった。

「薬物乱用防止に効果的と考える内容を Fig. 4 に示す。『薬物の怖さのアピール』で1回目9点が、2回目では2点となり大幅に減少した。『薬物使用の悪い結果を強調する』では3点が0点に、『薬物を使用する人の悲惨さを伝える』では7点が3点に減少した。『回復の希望の提示』には、1回目では4点だったものが2回目には13点と大幅に増加した。『社会保障サービスの情報提供』では4点が10点に、『医療情報の提供』では7点が13点に増加した。『依存症の正確な知識の学習』は1回目13点と2回目15点と高得点であった。『受講しない人に罰を与える』『寝た子を起こすので何もしない』『受講者に褒美を与える』は1回目2回目のいずれも1点か2点で、低得点であった。

Table5 質問紙調査1回目と2回目の平均値と標準偏差値 (n=15)

1回目		2回目	
平均	SD	平均	SD
薬物依存の当事者のイメージ			
60	14	43	13
薬物依存からの回復のイメージ			
26	7	20	4
薬物乱用防止に効果的と考える内容			
3.3	1.7	3.8	1.0

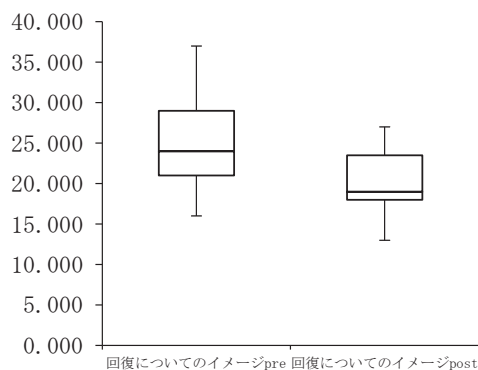


Fig. 2 薬物依存からの回復についての偏見1回目と2回目の結果 (N=15)

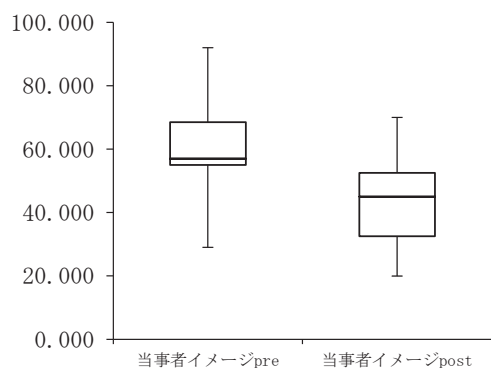


Fig. 1 薬物依存の当事者に対する偏見1回目と2回目の結果 (N=15)

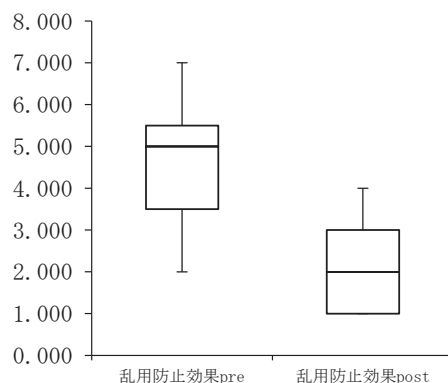


Fig. 3 薬物乱用防止に効果的と考える内容1回目と2回目の結果 (N=15)

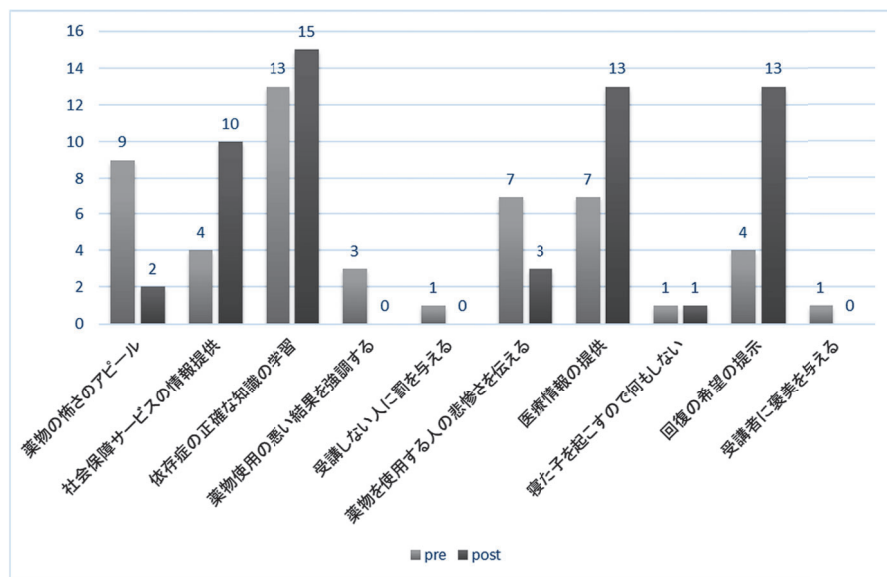


Fig. 4 薬物乱用防止に効果的と考える内容 (N=15)

5. 考察

(1) 質問紙調査の結果の考察

調査協力者である学生のほぼ全員が小学校から高校までに薬物乱用防止の授業を受けており、具体的な内容については曖昧な記憶しかとどめていないにもかかわらず、「一度でも薬物に手を出したら人生が破滅する」の1回目に15名中10名が「そう思う」「少しそう思う」と回答しており、根拠不明のまま不正確で非科学的な情報が植え付けられていることが判明した。また、「薬物乱用防止の啓発情報に触れた経験」への問い（自由記述）に「ドラマ」や「芸能人逮捕報道」をあげている者が複数おり、さらにはその内容によって「怖さ」「乱暴」というイメージを抱いたとの記載から、啓発が目的とされる内容ではない情報に対して批判力を持たず、その情報を鵜呑みにして取り込んでしまっていることがうかがわれる。小学校・中学・高校での授業で、薬物について危険や恐怖をことさら誇張した薬物乱用防止教育を受け、その時に受け取った薬物を使用する人物のイメージと、日ごろ何気なく視聴する娯楽番組のそれとに齟齬がないかあるいは一致しており、たいした疑問を抱かずそれらの情報を取り込み続けたことによってスティグマが強化され、本授業を受講するまで修正する機会を逸したままであったことが推察される。そして、そのことがまさしくわが国で薬物依存の正確な知識の普及が圧倒的に不足していることを如実に物語っていると言える。

質問紙調査の結果から、「怖い」「乱暴」「危険」など当事者に対して著しく偏った印象が強いことが明確になったが、授業後にそれらの数値が有意に下がっており、スティグマが低減されたとうかがえる結果が出ていることから、スティグマは、偏った情報によって高まりもするし、

新たな知識や情報によって低減することもあり得ることが示唆された。

また、「薬物依存の当事者に対する偏見」と「薬物依存からの回復についての偏見」で相関が有意であったことから、当事者についてのスティグマが薬物依存からの回復についての誤解を生み、知らず知らずに不適切なかかわりをしてしまっ、て、当事者の回復を妨げ、なおかつ排除に加担してしまっている可能性もあり、そのような不適切なかかわりが当事者を追い込みますます依存症を進行させることによって、当事者へのスティグマを増幅させるという悪循環が地域社会に起こっている可能性が指摘される。

今回の調査協力者は、将来的に何らかの援助職に就く可能性が高い者たちであることを考えると、本来ならば回復に促進的にかかわることが求められる立場でありながら、「一度でも薬物に手を出したら人生が破滅する」というイメージに疑いを持たないままでは、人生が破綻してしまっているような怖い人とかかわりたくないという忌避感情が起こるのは自然なことであり、そうすると、ようやく助けを求めて福祉や医療にたどり着いた当事者の回復を妨げてしまうばかりでなく、対人不信感を増強させてしまう可能性もあるという面では、スティグマは当事者にとって非常に深刻な問題を孕んでいると言える。その一方で、援助者の側も、スティグマを払拭しないまま援助に携わっていると、利用者あるいはクライアントや患者の薬物使用がわかるや否や、恐怖感を抱きながら対応することになり、精神的な負担感が増大するばかりである。援助者の精神的安定を保持し、不必要なトラブルを招くりスクを低減させるためにも、援助者自身に取り込まれているスティグマを払拭させておくことは重要と言える。

「薬物乱用防止の啓発情報に触れた媒体」で、「家族・親戚」の項目にチェックを入れた者は

いなかった。家庭内で薬物の話題は「触れてはいけないこと」が暗黙の了解になっているのか、はたまた、身近なことではないと思い込んで安心したい親側の意向で話題を巧みに避けてきたのか、いずれにしても、暗黙のうちに明示されてきたメッセージがあり、その影響は決して少なくないを考える。

(2) 授業における調査対象者の意識変容

授業開講時、受講者のほとんどが厚生労働省が展開している薬物乱用防止啓発のポスターや冊子について「見覚えがない」と首をかしげる一方で、薬物を使用する人について「怖い」「乱暴」「危険」などという非常に悪い印象を持ち、そのことに疑いを持つことさえしない様子であった。

薬物依存の「薬物」の定義には、覚醒剤や大麻等の規制薬物だけではなく、医療用医薬品とOTC 医薬品、エナジードリンク、アルコールも含まれており、服薬や摂取の仕方によっては通常の作用ではない働きが脳内で起こることを学ぶことによって、これまでは、自己とは全く関係のないこの誰かも分からない人物の問題であると考えていた薬物依存の問題は、実は非常に身近な事柄であることを悟ることになり、目を背けてはおれない問題との認識を持つに至った。そのことが、規制薬物使用の問題についての関心をも高め、学習意欲を維持することにつながったと後で語る者が複数いた。中には、「朝コーヒーがなければその日がスタートしない」と言う人も同じなのではないか。覚醒剤や大麻とコーヒーの違いはそんなにないのかもしれない」と語る者もいた。

依存症を薬物からゲーム、SNS などの行為にも広げて嗜癖の概念を学ぶことにより、危険な行為というイメージをストレスコーピングとしての視点によって捉え直しを行った。そのこ

とにより、依存症は特定の「意志の弱い人」「規範意識が低い人」の特別な問題ではなく、日常のありふれたことと地続きの事柄であり、問題化していると判断される境界線についてや、問題化した場合の介入及びサポートの仕方を検討することが重要であるとの共通理解を持った。

また、医療・福祉・司法・教育領域の最前線で活躍する4名の外部講師から、それぞれの苦労話や体験談、援助者としての葛藤と迷いに触れる機会を得て、援助者としての視点と立ち位置を知ったことは、自己の職業人としての将来を見通すためのとても貴重な体験となったようである。薬物依存の背景の貧困や虐待、複雑な家族構成、被差別、依存の世代間連鎖、精神疾患などの複雑多様な課題が絡む公開事例検討では、臨場感あふれる協議を目の当たりにし、地域内外のネットワークの構築及び多職種連携のあり方にリアリティを持たせたと思われる。

ダルクの施設見学を兼ねて入寮者らと交流し、率直な意見をいただきながら、入寮者らの人となりに触れるという face to face の体験によって、「怖い」「凶暴」「危険」などの刷り込まれていたイメージとは全く違うということを実感し、イメージをアップデートさせたようであった。当事者との触れ合いという心揺らぐ体験が、恐怖に先導された未知の存在に対する先入観を払拭し、同時に、薬物使用を防止するために過度な恐怖や非科学的な情報を植え付ける啓発のあり方に対する問題意識を強く持ったようである。

授業の終盤は、それぞれが出来上がった啓発資材を披露し、作品への思いを語り合った。全体的に明るい色彩を使っており、また仲間とのつながりをイメージした作品であった。それは、「ダメ。ゼッタイ。」というスローガンやそこに描かれている強いインパクトを与えるネガティブなデザインとは対照的な明るいイメージで描

いており、「ひとりじゃないよ」などというメッセージを添えている者が複数いた。また、Tシャツやバッグやペットボトルのシールに印刷するためのキャッチコピーやデザインを考案した者もいた。ペットボトルに各ダルクや相談できる公共機関の電話番号を掲載するというアイデアも出され、ダルク入寮者らに絶賛されていた。また、現在悩む学生に向けて、心の中を描写して共感を引き出す作品もあった。いずれにしても、脅しや恐怖でもって薬物を使うことを遠ざけようとする従来の啓発資材とは一線を画すものばかりで、すぐそばの存在に対して、困ったことがあるのなら薬物を使用せず解決してみようという呼びかけをしたり、薬物使用により困っている当事者に対して手を差し伸べたりしている。それは、薬物使用者を特殊な存在ではなく、共に存在しているということを同時に表現している。

(3) 先行研究による示唆

アレクサンダーらの「ラットパーク」と呼ばれるネズミの実験によって、「孤独」が薬物への依存を形成及び進行させることが示された。そして、「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部、日本ダルク・NPO 法人アパリ)において、完全断薬を維持する要因として、「利用者や職員との良好な関係性」「回復のモデルとなる仲間」(嶋根, 2017)と「自助グループに定期的に参加すること」(嶋根, 2018)が示され、仲間との関係性が薬物をやめ続けることを後押ししているということが明確になった。これらの結果から、薬物依存の当事者に対して適切にかかわるためには、「孤独」になりやすい当事者の特性と共に、当事者同士の良好な関係性が回復を促進することを理解しておくことが肝要で

ある。

成瀬は、「依存症、なかでも薬物依存症は、基本的人権を傷つけられることが頻繁に起こりうる代表的な疾患である」(2019)と踏み込んだ展開をしている。また、宮地(2012)は、「スティグマとは、主としてスティグマがある人たちとは対極に位置づけられる<普通>の人たちによって付与されるものである」とスティグマの責任を明確にしている。

これらを総合すると、自分は薬物依存とは無関係であると思い込んでいる一般の人々が、薬物依存の当事者に対してパブリック・スティグマを付与し、社会から排除して人としてないがしろにしている、その結果、当事者を社会資源から遠ざけ孤独に追いやっている。一方で、パブリック・スティグマを自己に取り込んでしまっている当事者は、セルフ・スティグマによって孤独感と罪悪感を深めて薬物依存を悪化させてしまっている。従って、パブリック・スティグマ及びセルフ・スティグマを低減させて、薬物依存への理解の底上げをし、当事者の回復を後押しするために、「仲間同士の良好な関係性」をサポートすべきは、自分は薬物依存とは無関係であると思い込んでいる一般の人々ということである。そして、心理や福祉の専門家はそれらの一般の人々に働きかける役割を果たし得る存在であるという自覚を持つことが求められる。

学生が制作した作品に添えられた「ひとりじゃないよ」というメッセージには、パブリック・スティグマが当事者を孤独に追いやってしまっているため、支援の手を届けるためには孤独の淵にいる当事者に向けてメッセージしなければ効果がないという意味と、「私たちはあなたをひとりにしない」という意志も込められている。それは、パブリック・スティグマ及びセルフ・スティグマを低減させるための責任を果

たす役割を担うものでもある。

薬物依存の背景にある「生きづらさ」には、スティグマの問題に加えて、トラウマが深く関連していると言われている。カンツィアン EJ とアルバニーズ MJ が提唱した「自己治療仮説」は、依存症領域の専門家の中では今や広く共有されている。両者は「自己治療仮説」について、次のように強調している。「心理的な痛みこそが依存症や嗜癖行動の中心的問題であること、そして、脆弱性を抱えた人は、その物質や行動がつかのまの、他では得られない安らぎをもたらすことを発見してしまったがゆえに、依存性物質や嗜癖行動に頼らざるをえなくなっている」(2013)。実際、筆者の臨床経験から、フラッシュバックやパニック発作の予兆を察知すると、薬物使用に至ることが非常に多いという実感を持っている。

(4) まとめ

本研究において、将来、心理職や福祉職として医療・福祉・司法・教育領域で活躍する可能性が高い学生が、これまで小学校・中学校・高校で受けた薬物乱用防止教育、事件報道やドラマなどの娯楽情報、家庭でのかかわりによって、薬物依存についての誤った情報を取り込み、パブリック・スティグマを植え付けられていて、当事者に対する偏ったステレオタイプの印象を持っていることが判明した。それらの偏ったイメージは、非科学的で根拠の乏しい情報によって植え付けられているが、受講者はそのイメージに疑問や批判力も持っておらず、まさに洗脳とも言える状態であった。そして、それらの偏ったイメージによって当事者に対する恐怖心などを生起し不適切な対応をしてしまい、当事者を孤立させて孤独感を強めさせ、さらに薬物使用へ駆り立てるといった悪循環に加担する可能性が高い状況であった。プロジェクト科目 I A【薬

物依存について考えるクラス】を受講し、科学的な知識、国内や諸外国の薬物政策の現状や歴史、そして当事者との face to face の交流、医療・福祉・司法・教育領域での経験があり最前線で薬物依存の当事者や家族とかかわっている専門家の知見や体験談、仕事への思いを聴く機会等が、薬物依存の当事者に対する偏見と薬物依存からの回復についての偏見を有意に低減させ、薬物乱用防止にとって効果的と考える内容についてのステレオタイプのイメージを有意に変容させた。

その結果、当事者の回復を阻害することを回避すると同時に回復に促進的なかわりが可能となった。加えて、当事者に対する偏ったイメージによって恐怖心を抱くなどして、援助者自身が抱える可能性が高かった精神的負担感の低減にも関与した。さらには、当事者に対して排他的・拒否的なかわりをしてしまうことによるトラブルを招くリスクの低減にもつながったと思われる。

また、薬物依存のパブリック・スティグマが付与されることとなった歴史的な背景や、薬物依存とトラウマとの関連についての研究を学ぶことによって、受講者が学習へのモチベーションを維持し、主体性や積極性を高めたばかりか、学生自身が同世代に対する啓発の発信者になるという能動性を涵養し、学びを深め定着させたと言える。

私見ではあるが、プロジェクト科目 I A【薬物依存について考えるクラス】の受講者らが、将来それぞれの臨床現場において学習を生かし、たった一人の利用者・患者・クライアントの孤立を防ぐことができれば、徐々に連鎖的に好転していく姿を見ることになろう。回復する姿を目の当たりにすることによって、薬物依存者に対するイメージの変容と、依存症臨床への関心の高まりが他の専門家にも伝搬していくこ

とが期待できる。その輪が広がっていけば、パブリック・スティグマが徐々に低減し、薬物依存専門を標ぼうする機関や専門家でなくても、どこでも当たり前適切な治療や援助が可能となるのではないだろうか。そうすると、当事者にとっても早期に転機を迎えられるようになり、失うものやリスクを低減させられ、より一層回復の可能性が高まるかもしれない。さらには、薬物依存の当事者だけでなく、地域住民にとっても治療や相談のハードルが下がり、孤立が起こりにくくなることによって誰もが暮らしよい安全な地域社会が実現する可能性も見えてくるのではないだろうか。自身が取り込んでしまっているパブリック・スティグマに敏感になり、それに対して科学的な批判力を持つこと、様々な立場の人たちと交流することによって視野を広げると同時に、根底にある社会構造を俯瞰する力を持つことは、依存症臨床のみならず、あらゆる領域の臨床に携わるために欠かせないと考える。

(5) 本研究の限界と今後の課題

本研究は、本校臨床心理学部の選択科目である授業の受講者を対象にしているため、受講前から一般の学生より薬物依存に関心が高いという偏りがある。本研究が大学生一般を反映しているものではないところに本研究の限界がある。今後、他学部の学生に薬物依存について学ぶ機会をどのように広げていくかが課題である。

引用文献

- ダルク (編) (2018). *ダルク 回復する依存者たち*, 東京都: 明石書店
- 法務省法務総合研究所 (2020). 犯罪白書令和 2 年版
法務省 Retrieved from
- Khantzian, E.J. & Albanese, M.J. (2008). *Understanding Addiction as Self Medication Finding Hope*

- Behind the Pain*. United States of America : Rowman&Littlefield Publishers (カンツィアン, E.J. & アルバニーズ, M.J. 松本俊彦訳 (2013). 人はなぜ依存症になるのか 星和書店) (pp.3-4)
- 松本俊彦 (編) (2020). *アディクション・スタディーズ 薬物依存症を捉えなおす* 13 章, 東京都: 日本評論社
- 松本俊彦 (2020). 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査 令和 2 年厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 分担研究報告書
- 宮地あゆみ (2012). スティグマの社会的理解, 鹿児島国際大学大学院学術編集集 *The IUK Graduate School Journal*, 4, (pp.31-39)
- 成瀬暢也 (2019). *ハームリダクションアプローチ やめさせようとしない依存症治療の実践*, 東京都: 中外医学社 (pp.172)
- 日本ダルク本部 (編) (2020). *TURNING POINT II ターニング・ポイント* 【改訂版】, 東京都: 日本ダルク本部
- 嶋根卓也 (2017). 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業費) 「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存症者の地域支援に関する政策研究」分担研究報告書
- 嶋根卓也 (2018). 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業費) 「刑の一部執行猶予制度下における薬物依存症者の地域支援に関する政策研究」分担研究報告書
- 嶋根卓也 (2019). 薬物使用に関する全国住民調査 (2019) < 第 13 回飲酒・喫煙・くすりについての全国調査 > 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 分担研究報告書
- Stuart McMillen (2019). 本当の依存症の話をしよう ラットパークと薬物戦争, 東京都: 星和出版
- 山本奈生 (2021). *大麻の社会学*, 東京都: 青弓社 (pp.69-70)

<要旨>

薬物依存の当事者に対するイメージと その変化についての研究

谷 家 優 子・松 田 美 枝・加 藤 武 士

薬物依存のパブリック・スティグマはセルフ・スティグマを形成し、回復を阻害するばかりか薬物依存を加速させるという悪循環を起こしやすい。本校プロジェクト科目ⅠA【薬物依存について考えるクラス】の受講者を対象に、開講時と終了時に「薬物依存の当事者に対する偏見」「薬物依存からの回復についての偏見」の調査を実施し検定を行ったところいずれも有意に低下した。「薬物乱用防止に効果的と考える内容」の変化も有意であった。回復とスティグマの関連を考察する。

キーワード：薬物依存、ダルク、スティグマ

<英文要旨>

Research on the images of individuals with drug addiction and changes in those images

Yuko TANIYA, Yoshie MATSUDA, Takeshi KATO

The public stigma of drug addiction creates a self-stigma, which not only interferes with recovery but also accelerates the addiction. It is a vicious cycle. We conducted pre- and post-surveys on "prejudice against drug addicts" and "prejudice about recovery from drug addiction," on the students of our Project-Based Learning Program 1A [Class on Drug Dependence]. The results indicated a significant decrease in both cases, and there was a significant change in "what they think is effective in preventing drug abuse." Therefore, we concluded that there is a relationship between recovery and stigma.

Keyword: drug addiction, DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center), stigma

